

「ンガラ」 現代の名グリオ

——マリ共和国のマンデ系グリオを中心に——

出水慈子

序

西アフリカ内陸のサバンナ地帯は東西六千キロにわたって延び広がり、スーダン（黒人の国）と呼び慣わされてきた。この地域を舞台に、多種多様な言語を話す民族の興亡が繰り広げられ、歴史を蘇らせる口頭伝承も今に多く伝わっている。〔註1〕本稿はマリのマリンケとバンバラの伝承者、とりわけ代表的グリオの今日について記述し、口頭伝承文化の知の担い手を自負する「ことばの師」の存続のありようを浮き彫りにする試みである。

その際、近隣諸語の代表的事例も多少参考にしたい。というのも、マンデ語族、フラン、カソンケ、ウォロフ、トゥクルール、ソンガイなどは生業や文化が異なり覇を相争つたが、三階層制による共通の社会制度からなっていたからである。この制度においてグリオは鍛治師、皮革職人、木地師とともに特殊職能民カーストのニヤマカラに属し、他の二階層である自由民ホロン（王侯貴族、戦士、農

民）及び奴隸ジョンとは専外の集団を形成していた。呼称こそ違え、かれらの職掌の様態は上記の異言語文化ではほぼ類似しており、口頭伝承の創出、管理、保持を担つていた。〔註4〕

ことばとはいえ、グリオの職掌は語り部の域を遙かにこえて多岐にわたっている。歴史的には、音楽家（奏者、作曲家、作詞者、歌手）舞踏家・道化、幫間、語り部・歌人（系譜語り、説話、叙事詩、讃め歌）仲介役（大使、隠密、使者、先遣伝令使、通訳）知識の担い手（顧問、データバンク）各種の儀式（赤子の誕生、通過儀礼、冠婚葬祭）の一手引き受け（準備、進行、引き立て役）調停（夫婦、家庭、親族、クラن、地域内の争い）等々、まさに口頭伝承文化のことばのすべてに関わっていた。したがつてグリオ個人も、得意分野の才能をのばしつつ、決して一芸の専門家ではなく、複数の職掌に携わるようになるのである。

さらに、グリオの生活扶養はホロンの義務であつたため、かれらはホロンに張り付いて、王宮はじめ町や農漁村、異民族のモザイク状居住地域等に常住し、同時に広域を自由に放浪かつ移動するので

ある。グリオが「社会＝身体」の「血＝知」を自負するゆえんはそこにある。

一、ホロンとグリオの相互依存

西スーザン全域旅游に流布するグリオの起源譚は、大きく二つの類型に分けられる。ひとつは「二人の兄弟が飢えに瀕したさい、兄が自分の肺を取り取り、弟に与えて命を救う。これをきっかけに口の達者な弟は兄を讃えグリオとなつた」というものである。もうひとつは、「預言者ムハンマドの足が腫れ上がり歩けなくなつた。勇者スラカタは血膿を絞り出して飲み干し、ムハンマド讃歌を歌つた。預言者は喜び、褒美やグリオとしての特権を与えた」というものである。両説話に通底する基本的モチーフは、血と肉を共有するホロントとグリオの堅固な相互依存性であり、この関係はマンデ社会の階層制と口頭伝承文化の内部で、根強い社会的相互行為として慣習化され、長年月の間生かされてきた。片方が簡単におりるわけにはいかない性格のゲームにたとえて、両者をカウンター・パートナーと解釈することも可能な相互依存である（坂井1989:21）。従つてグリオは、ホロンの純然たる下位集団とはいえない存在である。

しかし今日、ホロンも、グリオも、相互依存も変貌しつつある。特にグリオの一般的困窮と変貌は著しいが、それを把握するうえでもっとも重要な事項は、社会の実権を掌握し、職能民ニヤマカラを扶養していたホロン自身の貧困化である。西欧植民地化の時代にな

ると、伝統的支配層は税金である利益を、行政の要職者やヨーロッパ人と分け合うことになり、収入は大幅に減少した。彼らは伝統を維持しグリオ集団を庇護する余裕を失つたのである。独立以降は農村の過疎化、増大する都市化が事態を深刻にした。都市生活者は小市民的消費生活者であり、農村のホロンや以前の支配層とは異なる多くの支出をやりくりしている。高い生活水準を望み、次々と限りない消費意欲をそそられるばかりで、血族を養うことさえ過重になっている。その上、小市民の自己証明は必ずしもグリオを必要とせず、慣習として喜捨を迫るグリオの存在を忌避するようになつた。由緒あるグリオの一族や才能に恵まれたグリオは別格で、並み以下のグリオは困窮し、（1）棄業して、農業など他の職業に移行（2）半農半グリオ（3）フリーランス（海外移住を含む）（4）複数のパートロンを持つ等、厳しい対応を迫られたのである。特にマリでは、内戦に続く経済不振、社会主義体制の終焉、学生暴動と、国家自体が多難な今日、グリオの現状は一層複雑に錯綜し流动的である。「ンガラ」と称賛される名グリオはともかくとして、グリオの全般的な状況が、ある程度の落ち着きを見い出すにはまだまだ時間がかかるだろう。

二、政界とグリオ

現代の名だたるグリオは、国家権力の中枢に位する政界実力者と共にいる。選挙キャンペーンの応援演説に始まり、大統領を筆頭と

する政治家の地方遊説や外国訪問、国賓接待、国民的祝祭などに、

広報担当者、式典祝賀の取り仕切り、もりたて役として働いている。

その先駆的代表事例が盲人グリオ、バンズマナ・シソコ（1890—

1987）である。

今やマンデの伝説的グリオとなつた彼は、新生マリ共和国の誕生に深く関わり、独立後のモディボ政権下、グリオ公務員第一号になつた。「わが主は民をおいて他にない」「移ろうものを歌わない」と明言して、讃め歌はすべて過去の英雄偉人に捧げ、同時代の権力者への讃め歌は一度も口にしなかつた。グリオは歴史的に同時代の権力者の讃美者及び、同伴者であり、時代の脇役として歴史を紡ぐ存在であることを考えれば、彼の態度は伝統的グリオの対極ともいえるのだが、一方、これぞグリオの真骨頂とも評価されている。叙事詩に明らかなように、「グリオは王に支配され、支配者をいたくものだが、グリオを統率することは決してたやすいことではない。（中略）それは、ホロンの持たないことばと記憶を保持するグリオは、自由で支配者の意のままにならない存在」（M. M. Diabaté, 1975:38）だからであり、「あなたがたホロンは、あなたの口があなたはこうするといったら、そうせねばならぬ」（Conrad, 1990: 84-86）ほどの存在だからである。

基本的スタンスはそうであつても、実際には、グリオ個人の資質や処世術、家筋の流儀などに左右され、関係は多様に変化する。たとえば、バンズマナ・シソコと同時期にフネのベジエギ・カマラは（フネの常として歌わないと）大統領のお抱えグリオとして仕え、

大統領失墜とともに故郷に引退し、二度とグリオに戻らなかつた。

「二君に仕えず」という主人最重視の典型である。だが、カマラの同僚でガランケ出身のマム・シラは、すぐ他の政治家に乗り換えたために「ガランケのやりそなことだ」と見下されたといふ。

マンデ社会が伝統的グリオ観を評価基準にしている証拠といえよう。

今日、同ランクに位置するひとりが全バマコ圏グリオ協会会长のバカリ・スマノである。彼の青年時代には「グリオは社会に寄生する輩」なる批判が著しかつたため公務員になつた。しかし尊父の死去に伴い、ケラのケラ・バラ・ディアバテの推薦を受け、選挙により協会会长に選出された。スマノも大統領とファーストネームで呼ぶあう間柄だが、距離を置いた関係を望み、大統領も同意しているという。祝祭関連のほかに、顧問格としての役割についての詳細には今回は述べないが、遊牧民との内戦状態が続いていた頃、グリオ同士の話し合いを何度もお膳立てしたと彼は答えた（筆者インタビュー 1995.8.7）。その話しぶりや語り口は、フネ、モディボ・カラの益荒男ぶりと対照的におやかで、クマ・ブロ（じとばの家）建立の夢を、つぎのように語った。

「そこに生活苦や差別のためにグリオ出身を恥じて隠す若い世代と、旧制度崩壊による困難のため、支配層に背を向けてしまつた老人たちを集め、ジェリの名譽回復と本来のジェリヤの活動を行なうことが目標です」（筆者インタビュー、1995.8.7）

ジェリの奏する代表的な楽器にンゴニ、コラ、バラフオンがある。美しい音色の弦楽器コラを演奏するシディキ・ディアバテは、マリ

音楽の父と尊敬され、新年の式典や国賓接待の祝宴の席で演奏するが、テレビ、ラジオ出演、CD作成などは行なわない。由緒ある家柄出身の彼は、マリ独立直後、全国のジャーリを総動員し国立マリ音楽合奏団を組織した。古典を広め、数々の名曲を作り、ケイタ・フォーディバと海外ツアーをし、多くのフェスティバルにも参加している。

このような状況は隣国セネガルでも、ニジェールでも共通しているようである。大統領専属ゲウエル（＝グリオ）、エル・ハジ・マンスール・ムベイエは大統領側近であると同時にORTS（セネガル・ラジオ・テレビ放送局）のジャーナリストで、一九九一年当時、毎週ふたつのテレビ番組を担当していた（Panzacchi, 1994, 197）。ゲウエルの人気が選挙キャンペーンや、政治家の遊説の客の動員数を左右するほどで、専属グリオのいない政党はない。同時期ニジェールにはディボ・バディエ、バディエ・バニヤが大統領専属として活躍している（Hale, 1990, 43）。

三「実業界」とグリオ

実業家をパトロンとするグリオは多い。叙事詩語り最高の実力者と称されたタイルウ・バンベラは、グリオ業を否定するイスラムのセクトに入信したため、晩年（一九九二年没）人前で語ることはなかったが、唯一、例外は、長年のパトロンであるセグの素封家であつた。フネのモディボもレパートリーに登場する人物の子孫一族

をパトロンにしているなど、近年すっかり減じている語りの分野でも、名グリオはパトロンを持つ。しかしパトロンの庇護といえば、ショウビジネス界の花形である歌姫ジェリムソの独壇場であり、過剰ともいえる庇護ぶりは、厳しいやりくり生活を強いられている一般ホロンとは別世界の華やかさである。典型的事例として二名を挙げておく。

カンチャ・クヤテはバマコを中心に活躍する、テレビやラジオ出演の多いスターで、アミン・ロイテと人気を二分する一方、パトロン争奪戦でも有名をはせた。他のひとり、セグのパンダ・ダンテは八十才前後でダ・モンゾンのジェリ、ティエンティギ・ダンテの末裔と自己紹介している。マリ放送開局記念に名曲「マリ・グンド」を歌い、マリ最初の放送ジェリムソとなつた人である。セグで引退生活を送るが、今でもパトロンに呼ばれれば歌う。二人は親子ほどの年齢差にもかかわらず、歌手ではなくニャマカラだと名乗るジェリムソ観で一致している。カンチャ・クヤテが「私は生まれついてのグリオであり、必要があつてのグリオではない」（筆者インタヴュー1995.8.7）と断言するように、ジェリ、ジェリムソの条件は美声、歌唱力に限らず、家柄はもとより、古典曲の理解、古老への尊敬の念、しきたり遵守など、総合的実力を要求され、曲によっては歌う資格を問われる。古老の許しを得るために必要な儀礼を欠かさない二人は、優遇してくれるパトロンやホロンとのつきあい方においても伝統的である。パトロン賛美の古典曲の小さいモティーフをいかして発展させる手法や、コンサートの際、会場に姿を見せたパ

トロンを讀える挿入歌を即興で披露する手法など、多くを繼承している。他方、好評であればそれをカセットやCDにおさめ、パトロダ・ダンバラ現代スター歌手と共有する、現代的得意技である。グリオは時代を記す事柄や、人心を鼓舞し、偉業や偉大な人物を讚え、歌詞を創作し、後世に歌い継ぎ、歴史を蘇生再生させようとする。この伝統的創作觀にふたりも忠実で、国策協力テーマ（識字教育奨励歌、サハラ緑化促進歌）社会的テーマ（マリに平和を、デモクラシー讃歌、エイズ撲滅）に基づくヒット曲をとばし、政界をもバトルにしている觀がある。

四、不特定多数の顧客とグリオ

グリオはラジオ、テレビ、テープ、CDなどの普及により、国際的規模で不特定多数の大衆を獲得し、職掌様態も大きく変貌した。一般的には（1）系譜語りや歴史語りが後退し（2）エンターテイナー化が進み（3）コーチャルベースにのりやすい、見た目や声の良さが売りものの歌手や演目が人気を博し（4）グリオ出自以外の、にわかグリオが參入したことも手伝って、執拗に報酬を要求する（＝グリオタージュ）金錢目的のグリオが目立つようになつた。マンデ系社会で最も親しまれている語り部ババ・シソコは、ラジオゆえに国民的になりえた典型的事例である。彼はマリ放送を通じ、毎週火曜日に新機軸の語り「ボイ」を二十年以上語ってきた。ボイ

とは、どんなジャンルの語りでも構わず繋げてメドレーに仕立てるもので、放送により盛んになった。現実離れた話しと乱痴氣騒ぎが中心を占め、主なテーマは豪華絢爛、エロティシズム、莫大な富、奇蹟などだが、彼のポイは「千一夜物語をバンバラ語におおまかなかたちで置き換え、セグのテクニックを使用し想像力を駆使して、勇敢かつ好戦的、しかし封建的なバンバラ社会の物語に作り替えている。道徳的には女とお金に傾斜する社会」（Couloubaly, 1994, 58-9）の物語りである。彼は新機軸の語りでひと時代を画したにもかかわらず、どこか物憂げで、語り物の華、叙事詩は「いつか消えていくだらう」（筆者インタヴュー-1995.8.末）と悲観的だつた。

先述のスマノもラジオを通じて語るが、「（マリンケのグリオは）歴史（グリオの口承史）を（伝承すること）を放棄しようとしている」と述べた（筆者インタヴュー-1995.8.7）。しかし、口承史というジャンルの重要性が再確認されれば、マリンケの協会にも再考の余地はあるにちがいない。事実、外国人学者ばかりでなく、各國政府にも口頭伝承史に対する真剣な取組が見られるようになつた。セネガルではグリオがORTS局員となり、ウォロフ、セレール、マンディンカ、ソセ、フランなどそれぞれの言語で講義する番組が導入され（Panzacchi, 1994, 193）、ニジェールではニアメイの大学をはじめ各種専門学校で、講義や実技を含む後継者育成も実施されている（Hale, 1990, 43）。系譜語りそのものは高齢化と繼承者激減、にせの系譜語り増加など深刻な事態にある一方で、系譜を含む知識、人脈、交渉術を活かした貿易、交易関連の仕事、代書屋、私立探偵

等々、普通のグリオの新領域開拓が報告されている (Panzacchi, 1994, 193)。

音楽は不特定多数の大衆を惹き付けた結果、拡大的発展を遂げた活力ある分野である。テレビ、ラジオ出演、テープ、CD、コンサート等々、グリオの活躍の場は広く、誰もが憧れてやまない。全くの「ヨーロッパ」に変身、グリオひとりじめ、両者の使い分けなど、グリオの対応は様々だが、先述のクヤテ、ダンテはじめ、事例をあげるまでもないほど衆知もあり、本稿では省略する。

五、贈与と報酬

以上で明らかのように、今日、名グリオの基本的活動様態を見る限り、かつての名グリオのそれが質的変化を遂げているとはいえない。しかし将来、扶養義務を負っていたホロンとの相互依存を喪失し、口頭伝承社会において血肉を分ける同伴者であった関係が、すべて解消してしまらないとになれば、根本的変化が起こるかもしれない。それを握るひとつのヒントが報酬にあるのではないだろうか。

はるかマリ帝国スンジャータ大王のグリオ、バラ・フォセケの頃より、植民地政策下の時代、そして独立後の今日でも、グリオは俸禄、給与、賃金等々、一定の報酬体系に基づいてその生業を営んではいない。叙事詩には、「十頭の馬や奴隸」(Hale, 1990, 237) 「アーラからクルコロ」としたる「バーバラ領地の村々」(Conrad, 1990, 191) 「一頭の牛と楽器」(Mayer, 1991, 73) 云々と、祖先に与え

られた褒美、贈り物の数々が歌われている。しかし「下され物に当時はこだわらず」「何の不自由もなく暮らすように庇護してくれるか否かが一番大事」だった (Danbo, 1976, 13)。そう云いつつグリオは、すべてを与える、自分の人差し指まで与えたホロンを讀える名曲「マリ・グンド」を歌い、金品贈与についてほのめかす姿勢は崩さないのである。

現代のパトロンが歌姫に家屋敷、外国車、メッカ巡礼^(註17)、世界一周

など法外な金品を与える、貧しい国の驚くべき事実は良く知られている。語り部のジョリ・ベバも放送毎に、金錢同封のファンレター

を受け取りたいとほのめかす。夢のような贈り物は望まずとも、それにこだわらないグリオなどいない。かつては金錢が表出しないですむ、互いを良く知る人間同士の熱い関係が両者の間に育つたが、見ず知らずのホロン相手に生計の道をたてることなどなかつたグリオが、不特定多数のひとの各種の儀式に、金品目的だけで参与する場合が普通になってしまった。特に並みのグリオは外国人であり、近隣の異民族であれ、お金になれば、その人の過去を知る知らないに關係なく押しかけるようになつたのである。今日、職業選択の自由に基づけば、グリオも自活が原則であることは言うを待たない。既に、ショウビジネスに類する活動でグリオは報酬体系に組み込まれている。しかし、グリオもホロンも意識の上では、金錢物品を贈与する/される、と捉えており、外国帰りの若い進歩的インテリでやがて、この点については譲らない。ホロンにはグリオにたいする「当然の報酬」「賃金」を支払う意識がないかわりに、金とり亡者の

グリオタージュを拒否したり、制限したりは決してせず、しかし腹立たしげに愚痴をこぼしているのが現状である。その限りでは、両者の果てしない攻防は日常的に継承されており、根本的相互依存は保持されているといえるかもしれない。

どのグリオも多彩きわまりない、感嘆すべき言い回しで謝礼をほのめかすなかで、シディキ・ディアバテは時間給というビジネススタイルを、外国人である筆者に適用した唯一の例外だった。この处置は筆者周辺のホロンに、強い不満をかもしだしたが、これは翁自身の海外体験や、世界中をミュージシャンとして活躍する子息の影響に違いないだろう。翁の側からすればむしろ、時代を先取りする方策だったかもしれない。贈与、謝礼、報酬の共存バランスの変容、或いは合理化は、何よりも人間関係の変化とともにあり、結果、グリオの包含的な職掌に分化をもたらすこともありうるだろう。

六、調停とンガラ

ジェリであること、つまりジェリヤとは何か。「ジェリヤの本義は仲介、仲裁そして調停にある」とスマノは断言する。これは、多岐にわたる職掌のすべてが調停を頂点として収斂すること、即ち、他の活動はそこに到達するためのものであるという、グリオ自身による「グリオのことば」の定義である。グリオは社会の媒体であり、仲介者としての役割が非常に重要なことはカマラ・ソリの古典的著書にも詳しいが、グリオに関する文献はグリオの職掌を並列的

に説明し、その多様性を論じるのが通例である。総じて、グリオ自身の定義にあるような、ことばの本義に関しては希薄に感じられる。しかし氏は明快に説明した。

「グリオはもともとカーストではなかった。ホロンのなかに抗争があるたびに調停を買って出る、調停の得意な人が、そのための知識や芸を身につけるようになり、徐々に専門的になった。そしてマガン・ジャベ・シセの御代に、調停役を社会から任せることになり、同時に生活を保証されることにもなった。」

(筆者インタビュー 1995.8.28)

インタビューした他のグリオに異論を唱えるものはなかった。実際、多数の仲介役のなかでも、調停は誰にでも出来る役ではない。問題の性質如何では、グリオの権威にかかる難役である。大は民族間紛争、村落間抗争から、小は一族、家族内のもめごと、近代化、都市化に伴い頻発するようになつた交通事故の示談、法律による裁決後の不満解決、カースト民とホロンの婚姻による軋轢、海外の移住者居住地域内に於ける抗争などにもグリオが関わっている。ジェリムソは家族内のもめごとが中心であるなど、それぞれの得意領域があるのは当然のこととして、聞き取り調査に応じてくれたグリオ全員が調停の経験者だった。

たとえば、語り部、ババ・シソコはインタビューの三ヶ月前に地域間抗争を和解に導いたという。それはバマコから六〇キロほどの村落で起きた井戸水をめぐる対立だった。複数の村が敵対し、双方の陣営がともに武装闘争派と非武装派に別れ、まさに一触即発の危

^{註18}

機にあつた。その地域出身者でバマコ在住の人がシソコに懇請し、現地に駆けつけた彼は、三日三晩、昼夜分かたず調停にあたつた。まず四つの派を隔離し、年代別グループに分け、順ぐりに言い分を聴いて回り、交渉し、説得し、最終的には沈静に成功したというのである。

家族のもめごと得意とするジェリムソのカンジャ・クヤテは離婚後独立で一族郎党を養う実力派だが、ホロンの夫婦不和、夫の浮気などをおさめるにあたり、婚姻維持の原則で調停しているのも興味深い。老パンダ・ダンテも同じ主義を貫いているが、家族のもめごと調停について平易に説明してくれた。少し長いが引用してみる。

「若いときには歌を歌うのが好きで楽しかったが、年を重ねたおかげで和をとりもつ役を貢えるようになりました。歌うことにはジェリムソとして重要だが、歌で有名になることも大事です。いろいろなことができるからね。特に名の知られたジェリが調停するとなれば、知名度が自分に重みを与える、無名だったらでききそくにない調停だって可能になる。尊敬され、頼みにされるようになればなるほど、わたしの調停を拒否するのはむずかしくなる。(中略)ことがあると、いろんな人が入る。ホロンも入れば、親類、友人、近所の長老、もつれればもつれるほど、とにかくいろいろですよ。勿論あの人もだめ、この人もだめ、と長引くうちに、当然グリオも入って来る。いろんな人でだめで、グリオも全部ダメと突っぱねようと思えば出来ないことではない。けれどもね、考えてもご覧なさい。長い一生、もめごとを避け

て通りおおせる保証がどこにあります。誰だつて今後のことを考えるなら、有名なグリオのそれこそ最終的な調停まで反故にするようなバカはまあ出来ないのが普通でしよう。そこまでやつてしまえば、将来誰もあなたの願いを聞いてくれなくなるりますよ。問にも入ってはくれなくなる、そんな重荷をあなたは背負わなくちゃならない。無茶というものです。」(筆者インタビュー—1995.8.19)

最後に文献による事例だが、パリのアフリカ人居住地域での抗争を挙げておく。フランスでは、マンデ系諸族はもとより、西アフリカからの移住者、出稼ぎ労働者、経済難民、密航者が増加の一途を辿り、二、三世を含む新しいフランス人を形成している。過疎化し活力を失った農村部より、外国のコミュニティのほうが、効率良く収入を得ることができるため、アフリカ人居住地域にはグリオが何人も住み、アフリカと往来しているのである。先祖伝来の地縁のみではない人員構成が多いこうした地域では、グリオの讃美歌や有利な口込み宣伝の需要が高いうえ頻発する抗争の和解にも、グリオを頼むものが多いのである。遠く離れていても、郷里と相互的関係の絆が保たれている移住者共同体では、出身地の文化や民族的特徴が、その共同体のアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼすばかりでなく、郷里集団の意向が往々にして強く反映する。こうした特徴が、郷里と繁く往来するグリオにとって有利な環境となる。以下はソニンケ出身が七割を超える居住地区の事例である。

この地区のマラブ出自集団、ディアカンケをドキュメンタリにお

さめる企画がパリのテレビ局から持ち込まれ、その謝礼等をめぐり起きた内部抗争は、この地区の住民と、近隣の移民居住地区の住民および郷里の共同体をも巻き込むことになった。ディアカンケはグリオを擁する集団ではないので、ソニンケのグリオが事にあたり、

糾余曲折のうちに、当初は攻撃的になつて吊しあげられたグリオが、結局はこれを調停して治め、テレビ収録にこぎつけたというのもある (Barou, Jacques. 1990. 141-151)。

これらの事例は抗争の原因、状況、規模、当事者たちの関係、いずれを見ても共通項がなく、争いであることのみが共通している。しかし、グリオの側の調停の委細に注目してみると、対象者の系譜を誦じ、当事者のみならず、数世代前に遡る人たちの、系譜以外の関係にも精通しているグリオが、地域の歴史、ことの由来、名称の起源等々から説き起こして、古典歌曲や諺をちりばめた話術で関係者の心理を操り、必要とあればグリオに許されている嘘も活用するなど、グリオ自身による「ことば」の定義どおり、調停をしていることがわかる。グリオの調停を支えているのは、伝統的価値観であり、長老支配制であり、あなたがたホロンが主要構成員である現社会を和をもつて維持してもらいたいという、マンデ社会に血肉化し、慣習化した思想である。それは具体的には、地域に根ざし蓄積されたグリオの調停ノウハウと、知名度を含むグリオの重み、グリオが代弁するホロン社会の圧力となって機能する。ジェリ・ババが武装闘争派に向かい、「この火種は燎原の火となり、マンデのみならずマリ全土を焼き尽くすだろう」と演説して説いたように、グリオ

のことばの有効性は、グリオと価値観を共有するホロンに限られるが、この価値観の主はホロンなのである。グリオは自分が模範を実行して示すのではなく、ホロンに行動規範を想起させ、ホロンが従うべき筋を代弁するのである。

とはいえる自己の得意領域を究めつつ同時に、仲介から始めて調停者に成長するまでには長年月を要する。しかも引用した人たちでさえ、調停は頻繁にあるわけではないと語っている。昔の対立抗争の始めと終わりにもグリオがいたが、あくまで統治者の実権行使代理としてであった。それが和平調停者グリオが叙事詩のなかに、ほとんど伝承されていない原因か否かはさておき、現代の大規模な抗争レベルでもグリオのステータスは専門の代弁者である。しかし、実力行使を望まない争いが増えていく今日の複雑な状況下、マンデの諺どおり「燃え盛る火を熱湯で消してはならぬ」以上、調停者グリオは依然必要とされている。現代ンガラの名調停ぶりが後世に伝承されるか、はなはだ疑わしいけれども、調停はグリオにとっての重要事である。それをシココは「わたしにもたらされた富や幸せのどれとも全く違う喜びだ」とあらわしている (筆者インタビュー 1995.8.30)。

では、グリオが師とあおぐ「ンガラ」とはどのような条件を兼ね備えた人か。調査の相手に具体例をあげてもらうと、こぞつてあまり遠く遡らない歴史伝承に登場するグリオと、自身の祖父母、幼い頃に見聞した高名なグリオの名があがつた。筆者の調査からいえるンガラの条件は (1) 伝承されるに足る実力を有する高位のグリオ

である」と(2)「自ら有名人であるグリオが身内を推薦していることからして）自分の名をンガラとして広めてくれる、やはり実力と知名度の高い後継者を身内から輩出させること、のみつたのである。

ヤンセンはこの点に関連して、ケラの高名なジェリムソ、シラムリ・ジャバテ（一九八九年没）の例を報告^(註19)し、グリオの評価は「先代の奥義すべてを継承し、寸分違わず写しどっているか否かではなく、同時代人に高く評価されることのほうが、先代の偉大さと奥義を継承したことの証として重要視されている」(Jansen, 1994, 109)と結論付けている。

グリオは「昔のようではなくった」と嘆きつつ、時代の現実とともに生き延びている。名グリオ、ンガラとは、習得すべき「いろは」すべてを体得し、昔のままを忠実に踏襲した人の謂ではなく、時代に適応し、職掌の部分でしかない専門性に片寄ることなく、総合的に見て、同業者からも社会からも高い評価を受け、調停者として信頼されるひとであると考えられる。

[注]

(1) 本稿は一九九五年（七月末—九月初旬）マリ共和国で筆者の行なった調査、インタビュー、その後の文通及び文献に依拠している。本稿中に表出するグリオ名は全て敬称を省略した。知己を得た方のみ別扱いすることを避けるためである。

(2) グリオが初出するのは一六八〇年頃の文献である。これはポルトガル語の criado がふきでいるのではないかと想られている

(Camara, Sory, 1976, 98) ャンデ系諸語ではジョリ（男子）ジエリムソ（女子）ヘネ（じんばのみ、男子）ヒゼ。

(3) ャンデ系ではホロン（自由民）、ジョン（奴隸）、ニヤマカラ（職人）と呼ばれるが、「じんばの人」及び「じんばの師」グリオはニヤマカラ、カースト民に属し、内族婚世襲である。

(4) しかしサバンナ地帯の諸社会で、それぞれのグリオが受け持つ職域は異なりもし、重なりもするという複雑な様相を呈している。

(5) ヤリ帝国の「スンジャータ」、バンバラの「セグ王国叙事詩」、ウォロフの「カイヨール帝国叙事詩」、ソンガイ帝国の「アスキア・モハメッドの物語」等の歴史に基づく叙事詩には、ホロン同様、類型的に名グリオが伝承されている。

(6) 筆者の会ったモディボ・カマラの大伯父にあたる。「それで大統領の名前をいただき私にモディボと付けたのだそうです。」

(7) もの作り職人ニヤマカラは、いわゆる寡黙な職人とは限らない。この例のように職種に応じた知識や情報を豊富に持ち、ものもいう職人である。モディボ・カマラに会うときにはいつも、ガランケをひとり同道した。ほとんど口をはさまず、カマラを補佐している風だったが、グリオ志望だという。

(8) 一九九二年に一一〇才の長寿をまつとうされた氏の尊父エル・ハジ・ディアムサ・スマノは三十九年間その職にあり、農業も兼業していた。ドラヴェラの自宅に客人の絶えない、温厚篤実、信心深いグリオだった (L'Essor Quotidien, 9 Octobre 1992)。

(9) 氏はいへいかの祭や儀式を復活させたが、ニアレラの祭もそのひとつで、一九九七年、四半世紀ぶりに催された。何百人ものグリオが全国から参加する盛大な祭り、本年度はBBCが収録した。(Lucy Duran; Niarela Celebration, jeli nyenaje in Bamako, in Mansa p.5, Spring 1998.)

(10) 「*「ミコトヒバマ*のは大体がなんといへか、夫におねだりをする人の妻のよみな振る舞」、口説りおやゆのだ。」(Cisse et Kamissoko, 1988.325)

(11) ハンタヴァー時のティアベテは闇達そのもの、「放っておけば」の調子で、三日三晩でも平氣やす」とのことだった。しかし、一九九六年、突然、物故された。御冥福を祈ります。

(12) 昔、ジエロフ、カイヨール、バオル、ワロなどの国を形成していたウオロフ社会も王侯貴族、グリオを含む職能民、奴隸の三階層からなっていた。今日でもその重層的位階性は強く残存している。(Panzacchi, Cornelia, 1994.190)。

(13) かれらの場合はどうぞ「刻むシート」がものをいう（同右、1996）。

(14) 「*「ハナリムバ*に弾けず、カコフオリ（耳障りな騒音を発する）と馬鹿のひと覚え、自分の語るといけばも解せずがなりたてるのがせきのやまの輩が多い。私の息子でさえ、金になる楽器と歌うたいに憧れて、聞く耳をもたない。」（筆者インタヴュー 1995.8.30）

(15) 「ハンバ人たちが書いた歴史を学校で教えており、グリオの

歴史は軽んぜられてる。クリンの名譽とそれに命を賭ける民衆が背負っていた歴史をそんじで主張してみても始まらぬ」（筆者イントラヴュー 1995.8.7）

(16) 歌ばかりでなく実際に起きた事例が一件報告されてる。（坂井1989.71）

(17) 老ダントも屋敷がよいかメック礼がよんかと聞かれ、一度ともメック礼を選択したことを誇りにしてる。

(18) 「*「ハトバの人が*」(Camara, Sory 1976. ch. XIII) では仲介者グリオについて一章を割いてる。

(19) 一般にグリオの奥義口授は一子相伝の原則で継承されるといわれており、或るグリオの不意の死去は取り返しのつかない悲劇のように解説されるのが常である。シラムリ・ジャバテの突然の死去の際にも、まだ若い娘たちが秘密の奥義を含む、母の全知識を習得していないことを誰もが嘆いた。しかし、近年シラムリの世代が「残念ながら」と繰り返しがちなのに、次世代のグリオたちは、若い後継者がすでに立派なジョリムソになりつつあるといを高く評価し、これが若きジョリムソの定評になつてる。

【引用文献】

坂井信三 一九八九「西スーザンの語り部」『説話と伝承者』説話

と伝承学 一九八九、六九一八四頁)

Barou, Jacques. *Immigrés africains devant la caméra*, in Journal des Africaniestes, 60(1), 1990, pp.141-151.

- Conrad, D. C. 1990. A State of Intrigue; Oxford Univ. Press.
- Couloumbaly, Pascal Baba. 1994. *The narrative genre among the Bamana of Mali*, in Research in African Literatures, Spring 1994, vol.25, No.1, pp.48-60.
- Darbo, Seni. 1975, *A Griot's self-Portrait: The origin and Role of the Griot in Mandinka Society as seen from Stories Told by Gambian Griots*, Gambian Cultural archives.
- Diabaté, Massa Makan. 1975. *L'Aigle et l'épervier ou La geste de Sunjata*, P. J. Oswald.
- Hale, T. A. 1990. *Scribe, griot, & novelist*; University of Florida Press.
- Jansen, Jan. 1994, *The Dynamics of 'SUNJATA': reports about the past in Kela (MALL)*, in Text and Tales, Studies in Oral tradition, ed. by Oosten, J. Research School CNRS, Leiden, pp.107-115.
- Mayer, G. 1991. *La lance, la vache, le livre, récits épiques Toucouleurs du Sénégal Oriental*, Editions Karthala.
- Panzacchi, Cornelia. 1994. *The livelihoods of traditional griots in modern Senegal*, in Africa, vol.64, 1994, pp.190-210.
(ソニ・セネガル大統領大作)